椎葉小学校
学校だより

みんなわになれ

令和３年11月15日(月)
第 １１ 号
文責　校長　鮫島　良樹

原風景

私は旅行が好きです。と言っても、海外には一度も行ったことはありません。お金も暇もないので、せいぜい1泊、長くて２～3泊の近場の小旅行専門です。行ったことも見たこともない土地の風景や人々の暮らし、歴史や文化等に触れるのが大好きです。予めプランを立てるのは苦手で、たまたま見たり嗅ぎつけたりして出会えたものを楽しんでいます。（しっかり下調べをしておけば、もれなく楽しめる）という考えもあるでしょうが、お膳立ては面倒だし、期待外れより偶然出会えた喜びを味わいたいと考えています。

さて、旅行をしたいという欲求の中に、私には「無意識に追い求めているもの」があると自覚しています。それは「失われてしまった風景」、私の記憶の奥底に眠る「原風景」との再会です。

一軒家で鍵っ子だった私の幼い頃の遊び相手は、自宅の周りに広がる豊かな自然でした。小川や田んぼ、里山が間近にあり、退屈な私を好奇心いっぱいの少年に育ててくれました。家の中に入ってくる蛍、田んぼに産み付けられた無数の蛙の卵、水路を泳ぐドジョウやサンショウウオなどいろいろな生き物が棲んでいました。また、桑の実、椎の実、菱の実、ワラビにゼンマイと、四季折々に採れる恵みがあり、里山は宝石箱のようでした。ふんだんな自然が私を決して飽きさせることなく受け止めてくれていました。

しかし、故郷である宮崎市清武町加納地区は、市街地に近いという好立地であることから、瞬く間に開発が進みました。そして、私を育んでくれた自然を跡形もなく奪っていってしまったのです。

【校庭から西を望む風景】

心の拠り所

中学校から部活動に入った私。自転車が手に入って行動範囲が広がりました。友達や勉強・部活動に割く時間が増え、興味の世界も変わっていきました。開発によって、日に日に失われていく自然の風景を見て、少し寂しさはありましたが、感傷に浸ることはありませんでした。振り返ることよりも、未来そして世界を広げていくことに目を向けるのが若者ですから。

高校に入り、大学進学を考える頃には、恵みや癒やしをもたらす自然よりも、華やかでクリエイティブな都会の暮らしに憧れていきした。そして、ドキドキわくわくしながら埼玉の大学に進学したのでありました。

大学1年目は学生寮に入りました。学生運動の幹部生が二人も同室だったため、接触を避けるべく部活動に入りました。２年目からは寮を出て、アパート暮らしを始めました。憧れの都会暮らしについては、先立つものもなし、特に自分から入ってみたかった世界もなし、1年も経たずに持て余すようになりました。むしろ、都会に行ったのに地元生の部活の仲間と、自然を求めて長野県や群馬県などの遠方に足を運んでばかりいました。「都会は…、都会の人は…」と負け犬の遠吠えのような思考も盛んにしていたように覚えています。この頃から、ホームシックと重なったのか、自然豊かな田舎暮らしの良さに目が向いていったように思います。自分の心の拠り所は、幼い頃に私をしっかりと受け止めてくれたあの原風景なのだと。

一抹の寂しさ

個々の価値観や暮らしが尊重されるようになってから、社会教育や地域の教育力の衰退が始まったと言われます。

私も幼い頃、上加納地区は公民館活動や地域行事が盛んでしたから、子ども同士はもちろん、地域のいろいろな世代の人と様々に関わっていたように記憶しています。今思えば、夕方毎日のようにソフトボールや相撲を教えてくれていたおじさん達は、仕事はどうしていたのだろう？行事の準備や運営に携わりながら子どもの世話をしてくれていたおじさん、おばさん達は、さぞ忙しかっただろうなあと頭が下がる思いです。

残念ながら、今では、公民館活動も地域の行事も下火となってしまいました。私達の世代がバトンの受け渡しをうまくできなかったのが原因なのか、そもそも人と人とのつながりが希薄になってしまったことに起因するのか分かりませんが、子ども達を育てる環境としては、昔の方が遥かに優れていたと思います。高齢者が増えたとはいえ、便利な地区ですから、移住者が多く人口はそこそこいるのに不思議な話です。住民の顔と名前はほとんど分かっていた昔とは大違い。自然も失われてしまったので、違う町に住んでいるようだという感情も沸いてくる始末です。

【６年ひまりさんのスケッチ】

椎葉で学ぶもの、遺すもの

１１月７日厳島神社秋季例祭が催行され、その中で子ども神輿が奉納されました。神輿を担いだ子ども達は、太鼓や笛の拍子に合わせ、「わっしょい、わっしょい」と元気な声を響かせながら上椎葉商店街を練り歩きました。神輿を無事に神社へ担ぎ終えた後は、祭殿に上がり、神様の前で正座をして宮司様から詔を賜りました。子ども達は、何をしているのか、何を話しているのか正しくは理解できないとはいえ、「厳かさ」「由緒」「日本人の心に宿るもの」などを感じ取ることはできたと思います。そして何より、この体験は子ども達の心に原風景として、拠り所として残っていくことになると思います。

先日、上椎葉みらい会議に出席しました。商店街の復興、防災の取組、高齢者の暮らしなど様々な課題について話合いが行われました。未来は子ども達のものであり、子ども達の未来のために教育を行う学校ですから学校運営協議会の在り方も視野に入れて勉強したいと考え、出席しました。人口減少という大きな問題の中で人材不足のために多くの役を担わざるを得ない住民の状況。何を遺し、何を削っていくのか考えていく大きな転換点に来ているようです。上加納地区は多くのものを失いました。逆に、新たなものを生み出せるチャンスが来ているのかもしれません。

【厳島神社の子ども神輿】

【祭殿で拝む子ども達】